人間発見

清流文化の水脈を繋ぐ ①

飛び込んだ漁師の道 伝統漁法を次世代に

川漁師 平工（ひらく） 顕太郎（けんたろう）さん

川の幸を食卓に送り、遊びやくつろぎの場所でもあった日本の河川。その魅力を再び結実させようと情報発信しているのが岐阜・長良川の川漁師、平工顕太郎さん（34）だ。伝統漁法を後継しながら、クラウドファンディングで和船オーナーを募りエコツアーを企画するなど、今流の手法で清流文化を繋（つな）ぐ。

夏の長良川を代表する川魚はアユです。岐阜市を中心とするエリアでは5月から11月にかけアユ漁が解禁され、周辺で鵜（ウ）飼いも繰り広げられます。私も以前は鵜を操る鵜匠の舟で船頭をしていました。

アユは一生の半分を海で過ごす魚です。長良川本流の天然遡上のアユは長い距離を泳ぎ、海から戻るため、内臓脂肪は少なく体は鍛えられたアスリートのよう。幼魚の時に放流され、川で育ったアユとは顔つきや体つきが全然違う。天然のアユは尾ひれが放流されたものより大きいのです。遡上してからはずっと川底の石についたコケや藻類を食べてきた結果、スイカのような独特の香りがする。アユが別名「香魚」と呼ばれるゆえんです。水質と餌のコケが良ければ上質なアユが育ちます。

放流されて育ったアユの中にも最近は、食味が評判となったものもあります。しかし、天然ものとの違いは歴然。腹に脂肪が蓄えられ、アユの塩辛である「うるか」にすると、天然物とは味わいに違いが出てくる。天然物と放流したものをきちんと見極めて出荷しています。

子どものころから川は身近な存在だった。川に多くの人が関わっていることも生きる節目で感じ取ってきた。

自宅近くの長良川の支流で、子どものころは毎日のように魚を捕っていました。高校生になってもサッカー部の仲間と川に飛び込んで遊んだものです。

水産学を学んでいた大学生の時、岐阜県下呂市に入って、野宿をしながらアユの研究をしていました。すると「俺の家に来い」と寝泊まりさせてくれた人がいました。地元の川で操業している漁協の組合長で、研究を支えてくれたのです。

漁師になって、伝統の木造船を修理するときにも多くの人に助けられました。舟は1そう500キログラムもあり、1人では動かすことすらできません。大勢の人がいたおかげで、ようやく川に出すことができたのです。岐阜県の飛騨に地域の相互扶助組織として「結（ゆい）」があります。それを踏まえて私の舟に「結の舟」と命名しました。

川の漁について、文化や技術を伝承するのは今しかないと考えている。

私の次に若い長良川の漁師は60代です。漁の技術が失われる可能性がありました。そこで多くの人に川漁を知ってもらおうと、クラウドファンディングで和船オーナーを募りエコツアーも始めています。漁師は今も昔も1人ではできません。

漁師がいなくなれば船大工や網の業者も仕事を失う。川に生きる人を育てる試みを末永く続けるつもりです。

（岐阜支局長　小山隆司が担当します）

人間発見

清流文化の水脈を繋ぐ ②

川漁師 平工（ひらく） 顕太郎（けんたろう）さん

1983年10月、岐阜県各務原市に生まれる。父母は公務員で姉とともに育った。

子どもの頃から川が好きです。書道や水泳、サッカーを習う、ごく普通の子どもでしたが、家のすぐ近くに長良川の支流が流れていて、小学生の頃は放課後などにフナなど魚捕りをしてよく遊んでいました。子ども時代は本流の長良川を「大川」と呼んでいて、あまり近づきませんでしたが、地元の県立高校に進むと、夏にサッカー部の仲間たちと飛び込みに行ったこともあります。

高校3年生になった頃、進路は医療分野を選ぼうと思っていました。川で遊んでいたとはいえ、そこを職業の場にしようとは考えてもいませんでした。ですが、夏に自分は魚が好きだったことを思い出し、こうして進学したのが、日本大学生物資源科学部です。ここでも当初は海の魚を研究するのだろうと考えていたのですが、周囲から「岐阜県から進学したんだから、長良川のアユの研究をするんでしょう」と言われます。地元なのに長良川のアユについては何も知らない。研究したいという思いが強まりました。

大学2年の夏に岐阜県に戻って、下呂市に野宿しながらアユの研究を始めました。すると「アユの研究をしているのか。いろいろ教えてやるぞ」と、地元の川で操業している漁協の組合長が手をさしのべてくれます。家に泊めてくれただけでなく、近くにあった水産試験場に案内してくれたり、魚のさばき方も教えてくれたりしました。漁協関係者と接する中で「川で生きる大人ってかっこいいなあ」との思いが鮮明に残りました。私にとっては〝濃い夏〟となったのです。

魅せられた漁師の手 「自分も」高まる気持ち

水産学を専攻した学生時代も、魚への興味が尽きなかった

2006年に大学を卒業したが、企業などに就職しなかった。故郷の岐阜や川への思いが募り、漁師の道を模索した。

大学卒業を迎えた当時、世の中は就職氷河期に見舞われていました。思うように就職先も見つかりません。そこでまず川で働く道を探ろうと、長良川で操業する兄弟漁師、大橋亮一さんと修さんを訪ね、自分も漁師にしてほしいと頼みました。大橋さんたちは困惑した表情を浮かべ、「大卒では遅すぎる」とか「普通に就職して親を喜ばせたほうがいい」と言います。話はまとまらず、握手をして別れたのですが、その手は漁師らしくゴツゴツとしていました。漁師になりたいという気持ちでますます胸がいっぱいになったものです。

その後、カヌーイストの野田知佑さんが、子どもたちに川の魅力を伝えようと徳島県の吉野川で開いた「川の学校」の支援スタッフに加わりました。夜行バスに揺られ岐阜から徳島へと通い、アウトドアの活動を教えました。野田さんと話すことはほとんどありませんでしたが、後に「長良川にはあいつがいるから安心だ」と話していたと知り、うれしかったです。

その後しばらくは岐阜の製造業で働いたりアウトドアスポーツの運営会社で働いたり。岐阜市の水産問屋で魚をさばいた時期もあります。漁師になりたいが道が見つからず悶々とする日々でしたが、いずれも、後の自分につながったと思います。

人間発見

清流文化の水脈を繋ぐ ③

川漁師 平工（ひらく） 顕太郎（けんたろう）さん

川や魚、故郷の岐阜に関わるさまざまな仕事を経験したが、医療関連の仕事に就いていた姉のつてで岐阜県内の病院で事務職に就いた。両親の願いもあり、いったんは安定した仕事を選んだ。

病院で4年ほど働き、2012年には27歳で職場結婚しました。妻が男の子を妊娠したこともあり、この仕事で頑張らなくては、と思ったものです。ところが結婚後間もなくため息ばかりつくようになります。仕事が重荷になり、3カ月間自宅から外に出ませんでした。

その年の暮れ、精神科からうつだと診断されました。結婚したことで責任を背負い、生まれ育った岐阜で暮らしているのに川や魚にふれあえないことに息苦しさを感じていたのです。このころ、親しかった同僚が急死したこともあり、人生とは何だろうと深く考えるようになったことも影響していました。

一度は安定した職に 先見えず もがく日々

医師は「自分がやりたいことをするのが一番の治療法だよ」と勧めてくれました。そこで翌年春、岐阜市の長良川漁業協同組合を訪ねます。漁師になりたいと申し出ました。

漁師になるには、まず漁協の組合員になる必要がありました。その際、推薦書を出してくれたのが、大学卒業後に漁師にしてほしいと頼みに行った大橋亮一さんでした。「こいつは本気だから、ぜひ組合員にしてやってほしい」と漁協に掛け合ってくれたのです。

川や湖など内水面漁業の従事者は25万人でピーク時の1980年代の約60万人から激減。専業となるとさらに少ない。

舟を持って川の漁で生計を立てる専業漁師は全国でも100人を切っているのではないでしょうか。家族は私が漁師になることに大反対。父は「敷居をまたがせない」と激怒し、妻は新婚なのになぜこんなにつらい事に直面するのかと悲しみます。それでも、私は漁師になりたい思いを抑えられませんでした。

妻と職場結婚したが川への思いは募るばかりだった（病院勤務時代）

組合員になるために推薦してくれた大橋さんの「こいつは本気」という言葉が、岐阜市の長良川鵜（ウ）飼いの鵜匠代表である山下純司さんの耳に入った。

漁師になるための手続きをするために、漁協の事務所に出向くと山下さんが待ち構えていました。「鵜飼いの舟の船頭になってくれないか」と頼まれました。ちょうど自分の舟の船頭を探していたのです。

5月から10月の夜に長良川で繰り広げる鵜飼いは、魚を捕まえるウを操る鵜匠と、船頭の共同作業です。鵜飼い開きの5月を前に、4月から先輩の船頭が舟の操り方を特訓してくれました。毎朝3時間半、長良川に舟を出し櫂（かい）や棹（さお）の使い方を学びました。分からないことだらけでしたが、光る川面を進む爽快感は格別で、ようやく自分の人生に光が差し込んだと思ったものです。

船頭1年目は無償でした。ですが、鵜匠の山下さんと呼吸のあった仕事ができるようになり、やりがいがありました。例えばウがのみ込んで捕らえるアユは温かくなりがちで、すぐに冷やす必要があります。それは船頭の役割でテンポ良く作業ができるようになり、岐阜が誇る約1300年の伝統を守る誇りを感じたものです。

人間発見

清流文化の水脈を繋ぐ ④

川漁師 平工（ひらく） 顕太郎（けんたろう）さん

鵜（ウ）飼い舟の船頭となって2年目には休職していた医療関連の職場を正式に辞め、いよいよ漁師として生きることを決めた。

29歳の時、長良川漁業協同組合に漁に使う木造船を譲ってもらえないかと掛け合いました。鵜飼い舟の船頭は季節雇用で、10月中旬までのシーズンが過ぎると収入が得られなくなります。休職の期限が切れることもあり、漁師として生きる決断をしたのです。

漁協が引き合わせてくれたのは、当時60代と長良川で最年少だった漁師、服部修さんでした。最初は私のことを「こんなに若い人が漁師をするのか」と驚いていた様子でした。服部さんを通じ、使われていなかった舟を譲ってもらいました。

服部さんは、私が漁師となるまで、周囲から30年近く「おまえが最後の漁師になる」と言われ続けていた人でした。自分の後継者がいないことをずっと寂しく思っていたそうです。私が現れたことを純粋に喜んでくれた服部さんは、様々な漁法を手ほどきしてくれます。縄張り意識が強い川漁師は、本来はどんな網を使っているかさえ同業に見せないものです。異例のことでした。

漁に出るようになり、現実を思い知らされる。

船譲り受け いざ漁へ
自分なりの販路模索

苦労して水揚げしたアユを地元の卸売市場に持ち込むと、安い値段しか付きません。例えば同じ場所にいたアユでも、ベテランの漁師が捕ったものだと1箱（1キロ）1万円の値が付きますが、新参者の私が持ち込むと4000円くらいになってしまうこともありました。

市場で安値にされてしまうので、岐阜市内の老舗旅館の板場に持ち込んだこともありました。しかし「悪いけど、市場と同じ値段でしか買えない」と言われてしまいます。

若い。経験が浅い。親も漁師ではない。地元での信頼が低く、私が捕った魚は高く売れません。川から上がると、地元のほかの多くの漁師から「とろくさいヤツだ」「家族がいるのに漁師になるとは、おまえはたわけか」などと言われたこともありました。

次々に直面する厳しい現実を話すと、服部さんは全て分かっているという様子で笑みを浮かべて耳を傾けてくれました。自分も日々経験している出来事だと明かしたうえで「5年もすれば、若い顕太郎くんのほうが漁の腕前は上になる。くじけず、やってみやあ」と励ましてくれました。自分は1人ではないと心強く思ったものです。

そこで、自らの手で販路を広げようと、SNS（交流サイト）を使った魚の販売を始めました。朝水揚げした魚の写真をアップして、買い手を募ります。アユ以外の川魚やスッポンなどが水揚げできたことを知らせることもできます。固定客が付き魚を全国の顧客に販売できるようになりました。

鵜飼い舟の船頭の仕事は3年経験した時点で辞めました。観光事業の鵜飼いには常に光が当たりますが、川の漁の衰退を強く感じ何とかしなくては、と思うようになっていたのです。辞めると告げると、鵜匠の山下純司さんは大変残念がりましたが、「何かあったら、また戻ってこい」と送り出してくれました。

山下鵜匠の誘いで鵜飼い舟の船頭になった（岐阜市長良川、前列中央）

人間発見

清流文化の水脈を繋ぐ ⑤

川漁師 平工（ひらく） 顕太郎（けんたろう）さん

エコツアーで漁体験 多くの人に感動を

一般の人たちに川に親しんでもらおうと、漁の見学や魚の販売のほか、観光や飲食にも取り組みを広げている。

まだ鵜（ウ）飼い舟の船頭をしていた2012年、漁船として譲ってもらった木造船で、エコツーリズムのツアーを始めました。木造船を持とうと思ったとき、周囲の漁師たちからは「やめておけ」と反対されました。毎日、長良川に舟の様子を確認しに行かなければならず、交通費もかさむためです。西日本を襲った今回の豪雨でも、長良川の河畔で4日間、車中泊をして、舟が流されないようにずっと番をしていました。

こうした経費を稼ぐためにも、舟を使って何かできないかと考えたのが、エコツアーでした。自分が初めて舟で川に出たとき、川面の輝きや岸辺の風景に感動したものです。こうした感動を多くの人に味わってもらいたいという思いがありました。予約した人を舟に乗せ、漁をしているところを見せて、捕ったアユを食べてもらいます。今も続けていて、昨年は約350人が利用しました。

川の幸を食べてもらうことも文化の伝承につながると考えました。昨年12月、名鉄各務原市役所前駅の近くに、川魚の料理や軽食を直販する店「ゆいのふね」を開き、運営しています。

店には伝統的な漁の道具なども置いて、川の漁の情報発信拠点としているつもりです。開店資金を集めようとクラウドファンディングで50万円を募ったところ、ほぼ24時間で131人の人から目標の約3倍の140万円が集まりました。少し離れた名古屋などからも来店してくれるようになりました。

アユがたくさんいる長良川を取り戻したいと願う

店は妻と母も手伝ってくれています。漁師になるときには家族から強く反対されましたが、今は家族の協力なしには店を運営できません。

木造船のオーナー制度を立ち上げて、後継者の養成に乗り出した。

昨年、長良川の鵜飼い舟と同じ仕様の木造船を岐阜県美濃市の船大工、那須清一さんと和船研究者の米国人、ダグラス・ブルックスさんが建造しました。80代の那須さんは長良川では数少なくなった船大工で、コウヤマキの木を使う伝統工法で造った舟です。造船技術を後世に伝えるため、彼らはパソコンを使ったCADで設計図を残しています。

こうして誕生した舟を私が引き取り、クラウドファンディングで「和船オーナー」を募ることにしました。得られた資金を活用し、この夏から船頭や漁師を育成する試みに乗り出そうと考えています。

私はまだ経験の浅い漁師です。でも、さまざまなNPO法人や地域の経済団体と協力関係を結んでいます。漁師は今も昔も1人ではできません。今は寝る時間もままなりませんが、多くの人々との結びつきを広げながら、川の未来を探っているところです。

長良川も今回の豪雨に見舞われました。川漁師として、日本の河川の環境を守りながら、魚がたくさんいる川を取り戻していきたいです。

（岐阜支局長　小山隆司が担当しました）